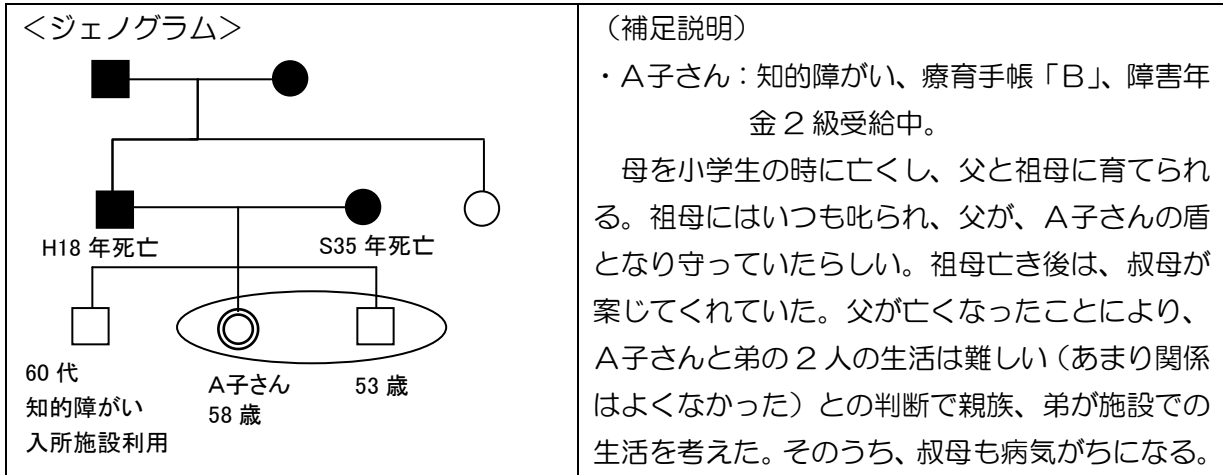


# 「本当は、わたし かわいたかったの！」 ～支えをつなげて 気持ちによりそって～

## 1 家族構成等及び支援のきっかけ



相談は、A子さんの叔母より「姪を施設に入れたいので、施設を探してほしい」との電話を圏域の障がい者総合相談支援センターが受けたことが始まりであった。A子さんの弟が、父の死後当該市役所に施設入所という事で相談に行っているが、措置から自立支援法に制度が変わったばかりで、説明の内容がよくわからず市役所の対応が不親切と思い、周りの者にも不信感を持っていた。

とにかく、ご本人にお会いした上で対応させて頂きたいということにして後日訪問面接を行う。

訪問したところ、A子さんは周りの家族や親せきがA子さんに施設に入所してほしいと希望しているということを知らされていない様子であった。A子さんは、亡くなった父親が建てたこの家で暮らすのを当たり前と思っており、「施設には行きたくない」という意思表示をはっきりとしていた。もうひとつ、A子さんは「以前施設にいれられた」と話しており「嫌で自力で戻ってきた」というふうにも話してくれた。

相談を受けたセンターとしては、叔母に会い～施設に入所するか、家族が世話をするか～のどちらかだけが選択肢ではないことを説明し、時間をかけてもA子さんも納得し、さらに支える家族もハッピーに思える生活を一緒に考えたいという事を提案し理解を求めた。

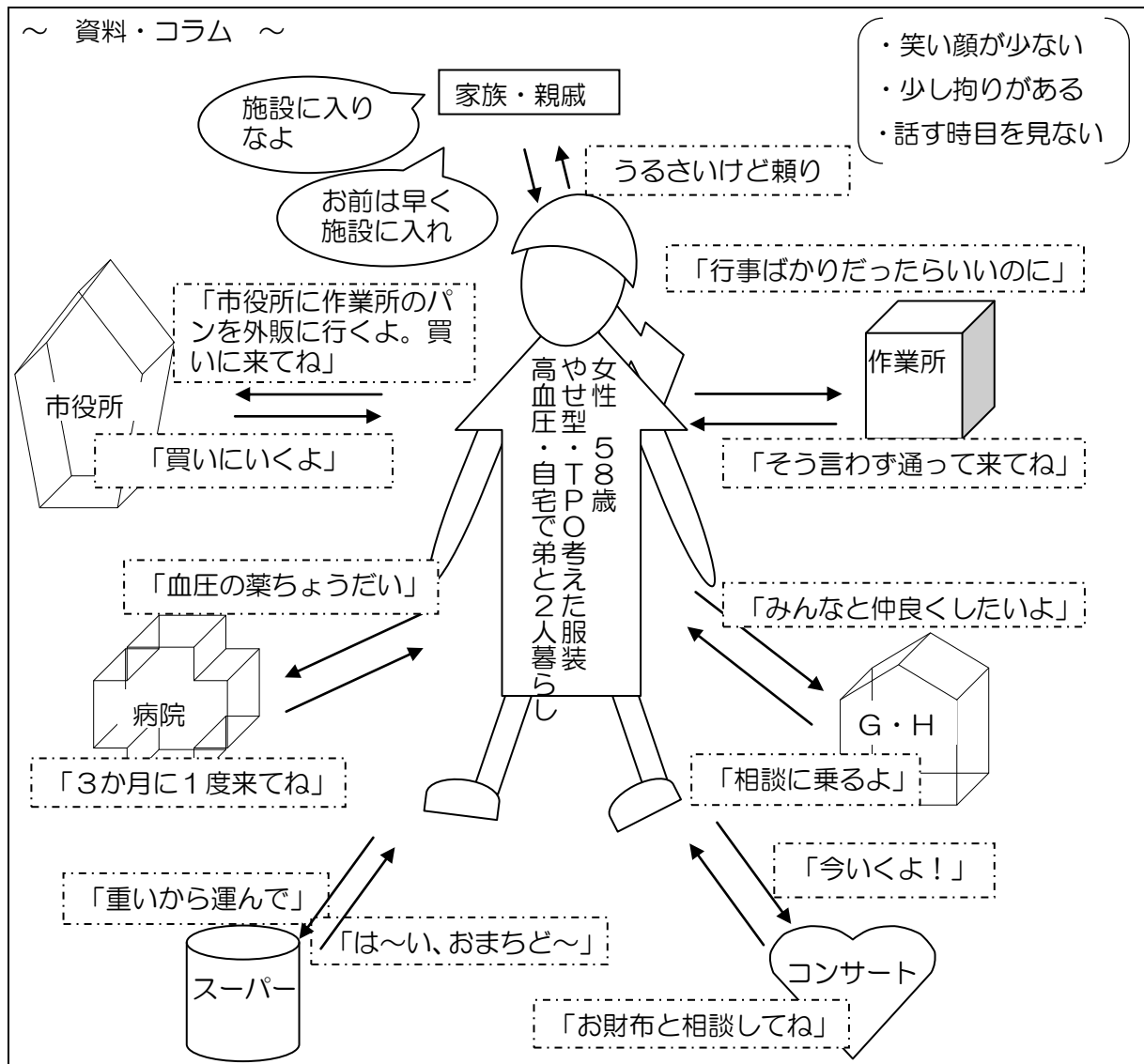
A子さんとは、周囲が「迷惑」に感じていた生活ぶり、例えば、身の周りの整理・整頓ができないことや浪費などについて少しずつ話し合いをし、改善できるところは具体的に一緒にとりくみたいという提案をした。

## 2 本人の希望する生活・アセスメント

- ・ ADL自立
- ・ 日常の買い物等はできるが、お金を際限なく使う傾向もある。
- ・ 調理はカレーライスなど作れるがあまり好きではない。
- ・ 掃除機はかけることができるが、部屋の整理は得意ではない。
- ・ ごみを部屋に積み上げている。
- ・ 電話は必要に応じてかけることができる。(携帯電話所持)
- ・ 自分の行動は自分で決定することができる。
- ・ 気持ちを手紙に託し、人と関わろうとする。

「この家で、暮らす」  
(施設には  
行かない)

- ・ 他人の指示より、自分の考えを優先させる。
- ・ 初対面の人とでも話ができる。
- ・ 物事の理解については、偏りがある。
- ・ 交通手段は、公共の交通機関を利用できる。



### 3 支援体制及び支援内容（経過）

まずは当該市の相談担当(保健師)に連絡、A子さんの要望を聞いた上で、それまで福祉的支援を、あまり経験していないことを踏まえ見守りも含めてヘルパーさんに繋げる。少しずつ関わりを増やす事にしてA子さんの状況については、関わっている者（機関）で共有できるようにする。この間は、ため込んだペットボトルや積み上げたごみ袋と一緒に捨てに行くなど少しずつ家を片づけることと、食事を習慣化することを提案し、あとは大好きなコンサートに行ったり、買い物をしたりと楽しめる生活をめざすことを目標とした。

A子さんが、ヘルパーさんとのお付き合いも慣れてきた頃、センターから作業所の見学を提案してみる。見学のその日に、クッキー作りの作業をみたたん「これやりたい」と作業所に通う意思を示したため、急いで支給決定の手続きを行い利用の契約をする。

本人の決めた生活時間があるので、そこの変更は強く要求せず、作業所へは、気が向いたら通うくらいから始まる。作業所の職員も気長に付き合いつつ、金銭管理について必要に応じて封筒に

分けるなどを提案するとそれも少しずつ受け入れ、いままでにない外の世界に馴染んでいく様子が見受けられる。

ここでは、支援の中心になる人がA子さんとのいい関係をつくりながらゆっくり変わっていき、家で気ままに暮らしていたA子さん支援から、作業所の一員としてのA子さん支援にシフトしていき具体的な提案をできるようになったことや、支援者同士が信頼しあえる関係でいれたことが、A子さんを焦らせることなく、ゆっくりと背中を押して行けたのではないかと考える。

また、並行して、A子さんの状態を家族に伝えていくことで家族も安心し、支援者との関係もできてきたのではないかとと思われる。少しずつA子さんの生活は改善されたものの、一緒に生活する家族にとっては理解しがたく我慢できないような状態もあり、家族から率直に作業所への相談となった。この時は、作業所職員と当該市の相談担当が親身に話を聞いている。こうしたやりとりのなかでA子さんの弟も支援者に対する不信感を払しょくし、支援者と一緒にA子さんの生活について話し合いができるようになっていった。

これを機会に、作業所の母体法人が新しく計画されていたグループホームでの生活をA子さんに提案し、外出好きのA子さんを見学に誘ったところ「ここに住みたい」と決心、第1号で入居。その決断の速さに周りも驚いたが、施設でも自分の家でもない生活のイメージ、もしくは希望が持てたのかと思われた。

家族も見通しがついたことによりグループホーム開所の準備が整うまで待つということになる。

他者からみて見過ごされそうな生活の中での葛藤や辛さを本人も家族も率直に口に出し、みんなで方法を考える中で解決されていったと考える。

また、支援者側のきめ細かな努力と一緒に、A子さんの表面には見えづらいけれども底力があり、新しい自分の生活を発見していったと思われる。さらに、良い関係ではなかった時間もあるけれども、基本に家族のお互いを大切に思う基盤が家庭の歴史にあったと考える。

#### 【ポイント】

- ・ 焦らずに少しずつサービス利用の提案ができたこと（押し付けない）
- ・ 支援者同士が、信頼できる関係であったこと（1人で背負わない）
- ・ 本人の力を信頼する

## 4 成果・効果

- ・ A子さんは実は、人と行動することを求めていることがわかった。
- ・ 福祉的な情報が伝わることで、A子さんも家族も新しい生活を発見した。
- ・ 支援者同士の信頼感により、1人だけが頑張りすぎることはなかった。
- ・ 提供したサービスがA子さんの新しい生活を求める心を揺り動かした。
- ・ 何よりも支援者が、A子さんの変化に学ばされた（時間をかける、期待をかけすぎない）
- ・ 家族もハッピーな気持ちで生活を変えることができた。

## 5 A子さんの課題・これから

- ・ 家族を含め仲間ともどう接したら気持ちよく暮らせるかに意欲を持てるようになる。
- ・ ケガや病気をせずに健康な生活を保つこと。